

Fishes of Japan, 27 (1918) 481, 1 圖, 1 圖版

田中茂穂博士が東京市場で採られたモンガラカワハギ科の1新種に附せられたもので、ゴトオモンガラ（五島紋殻）の和名がある。但しこの學名は今日 *Xanthichthys lineopunctatus* (HOLLARD) の synonym となり無効となつたが、和名は有効にして上の學名の標準和名として用ひられてゐる。

以上は予の知り得た全部であるが、此他にあるかも知れない。御氣付の方は御教示下されたく、もし脱漏があれば次の機會に補ひたいと思ふ。

追 懷 五 十 有 餘 年

松 本 亦 太 郎

五島清太郎博士には随分長い間御友情を辱うし、いつもお目に掛る時は遠慮のない親しみを覺えた。併しお互に至て淡泊なるつき合ひをなしてゐたので印象深く記憶に残つてゐる事が甚だ稀である。過去の夢を懷ひ出さうとするやうなもので快い氣分だけは出て来るが、どんな事柄を夢みたかが明瞭でない。

私は明治15年の秋から1年1學期の間京都の同志社英學校にゐた。其頃五島さんも上級に學ばれてゐた。その令兄の木津谷と云ふ方は天才的人であるが、五島さんも學才優秀であると云ふ評判が傳つてゐた。私は何の折であつたかは忘れたが、或る時五島さんの室を訪れた。其時五島さんは殆ど何にも無い部屋に只一人椅子に腰を掛け、小さい机を前に綠色表紙に赤脊皮の四六判の本を手を持つて夫を讀んでゐた。夫は3年生の教科書として用ひられてゐたスーイントンの萬國史であつた。私共一年生はスーイントンの萬國史を持つてゐる人を浦山敷思つてゐた。五島さんは多言では無かつたが、何か質問をすると要領を得た明瞭な答をする人である事を私は此初對面の時に氣ついた。

私は明治17年の初めに京都府立中學校に入つた。五島さんも同志社を中途で去つたので其後京都で五島さんに逢ふ折は無かつた。或る時新島襄先生を尋ねた折何かのついでに先生が五島さんに就て語られた。其言葉の中に五島さんは自己を過大視してゐると批評された。夫が學問に就てであつたか或は他の事に就てであつたか私は記憶してゐない。單に此評語のみが私の心に残つてゐる。何れにしても五島さんは青年時代に大なる抱負を懷いてゐた事が察知せられる。

私は明治19年の秋東京の第一高等中學校に入つた。其頃は高等中學校は豫科3年本科2年で、私は豫科2年に入學した。其時五島さんは理科の上級に在學してゐたが、翌明治20年には第一高等中學校を卒業し直ちに帝國大學理科學部に進入し、動物學を専攻せらるゝ事になつた。私が文科學部に入つた明治23年は丁度五島さんが大學を卒業し大學院に入つた時であつた。同志社在學中の友人で帝大に率先して入つた大西祝君は高等中學の前身たる大學豫備門を経て明治21年に文科學部を卒業し、直ちに大學院に入つた。村上直次郎君は明治25年に文

科大學に進入した。高田畹安君は京都府醫學校出身で同志社の宗教的集會によく出入せらるるので教員や學生に親しんでゐたが、同君も帝大に進入五島さんと同じ年に醫科大學を卒業された。是等の人々は京都にゐた頃からの知り合ひであつたので、時々相互に訪れて友情を漸次に厚うするに至つた。更に是等の人々の相會し友人範圍を擴大するに好機を與へたものがあつた。夫は帝大に私共が學んでゐた頃横井時雄君が大學其他學生に宗教的且つ精神的修養の機會を與へんとして本郷の金助町に講義所を設けた事であつた。横井君自身が中心となりそこで基督教を説いたが、時には元良勇次郎君などを頼み偉人の出現と時代との關係と云ふやうな事に就き講演をして貰つた。大學の學生の外に女子高等師範學校に學ぶ野口ゆか子、小川(塚本)はま子などゝ云ふ人々が來聽し、又濟生學舎に學んでゐた前田園子其他の女學生が來聽した。同志社出の丹羽清次郎君の令兄の夫婦も毎に此處に來り銀行家であつて親切に世話をした。人柄から見ても學問から見ても優良なる青年男女學生の一群が横井君を中心に集り、自然に高雅なる友誼を醸した。此講義所は其後本郷森川町の神社附近に移轉し、益々帝大に近くなり大學生の來會に便利になつた。其頃五島さんや村上直次郎君が主になり讚美歌の合唱組を拵らへようと云ふ事になつた。日本の歌詞で歌ふのみならず、英語の歌詞でも歌ふ稽古をした。2,3人の女の人も交り私も其仲間に這入れとの事であつた。五島、村上の兩君は英語の歌を歌ふ事が巧であつて、私などは其尻尾について行くに過ぎなかつた。

横井時雄君の住宅は其頃本郷西片町にあつて五島さんや私などは屢其家を訪問した。横井君の家には母親が居られた。此婦人は有名な横井平四郎先生の夫人であり、又横井平四郎先生に忠實に事へた壽賀と云ふ老婦がゐて家の世話をされてゐた。時雄君より其父君の皇謨に參與せられた當時の狀況や、松平春嶽、元田永孚、藤田東湖などゝ横井平四郎先生との關係を聞くのを私共青年は大なる喜びとした。五島さんは横井母堂や横井夫人及び其女友と親しく話をされ家庭的の交際には慣れてゐたやうであつた。其頃經濟雜誌社の田口卯吉氏が西片町に居住し、田口氏自身竝に其夫人も横井君の家族と相來往し、基督教に就ても學ぶ所あらんとした。私共は田口卯吉氏の如き活學者に横井君を通して知己になつた事を深く喜んだ。殊に私は第一高等中學に入る時日本文化史の受験は田口卯吉氏の日本開化小史なる著書により準備をし且つ此書に興味を感じてゐたので田口氏の訾咳に接するを樂んだ。

横井君は其當時帝大を始め高等教育の中心地となつてゐる本郷に基督教の大會堂を建てる事を企圖し、米國に渡り新英洲に行き有志に訴へ建築費を募集し、歸つて東竹町に煉瓦石造の會堂を新築し、又伊豫の今治に在つた自己の舊宅を組み放し、運送船により之を東京に運び新會堂と同地内に之を建て直し、そこを根據地として教學上の活動を新にした。單に宗教を説くので無く此會堂に於て有名な學者を聘し學術講演を開催した。横井君の周圍に牽引せられた私共も此爲めに多少の盡力をした。北里柴三郎博士は結核病豫防に就て、箕作佳吉博士は動物の進化に就て、村上專精博士は佛教哲學に就て、金井延博士は英國のトウインビーの社會事業に就て講演し、私共男女青年に新知識を鼓吹した。此本郷教會に新に加つた青年の中には有吉忠一君、高田富藏君、堤定次郎君、有吉明君、村松敏三君等後に夫々の方面に

活躍して有名になつた人々があつた。

五島さんは大學在學中寄生蟲の事か何かを研究したやうであつたが、專攻が異つてゐるので私は其方は知らない。只ディプロゾーン、ニボニコム、セイタロー、ゴトウと云ふ名の付いた新種の動物を發見した事を聞いてゐた。其後久しい間五島さんは鮭の發達も研究し、利根川の方に屢旅行したやうであつた。一高の動物學の教室であつたか、鮭の孵化して小魚になつた許りのものを澤山集めた瓶を幾つも五島さんが見せて呉れた事があつた。併し或る時五島さんは鮭の鹽漬の如き不味のものを喰つて喜ぶ人も世間には居ると語られた。私は鹽正を旨いと思ふ人間の一人であるから其時は心竊に苦笑せざるを得なかつた。五島さんは卒業して後就職する事に就て箕作佳吉博士に相談をした。何處に就職する爲めであつたか私は憶へてゐないが、箕作博士は「其世話は私の力の及ぶ限りで無い (out of my power)」と答へられたと五島さんは私に話された事があつた。

五島さんがどうして海軍大佐千住成貞氏令嬢の千代槌さんと知り合ひになつたのか、其事情は私は知らない。木村熊次氏の夫人が創立した明治女學校と云ふのが九段の牛ヶ淵附近にあり上流の子女を教育する新式の女學校であつて、後夫が番町の方に移轉し巖本善治氏が主として教育の任に當つてゐた。千住千代槌さんは此學校の出身者であつた。五島さんは千代槌さん並に千住さんの家族の方々と親しくされ、私や村上直次郎君は五島さんに引張られ時に千住邸に遊びに行つた。永田町の山王の神社の隣に其邸があつた。千住大佐は艦長で私共の行く時は大抵不在であつたが、千代槌さんの母君や其弟一人妹二人の方々にはお目に掛つて一緒になつて遊んだ。五島さんは毫も作り飾りの無い人で、千住さんの家の人々と極めて單純の様子を以て親しまれた。

五島さんは遂に千代槌さんと結婚された。九段の富士見軒で披露の宴を開かれ私も御招待を受け食卓後にディプロゾーンを引合ひに出し階老同穴の契と云ふやうな事を言つて御祝の語としたかと憶ふ。新夫婦は元園町に家庭を結ばれた。春になつて五島さん夫婦に誘はれ明治女學校に學ばれてゐた或る二人の令嬢と共に私たちは横濱を経て杉田の梅花を見に行つた。途中で春雨が降り出した。女の人々は傘の都合が出来たが私共男たちは農家から蓑を買つて夫を被つて停車場まで辿りついた事などがあつた。

五島さんは明治27年に自費を以て米國に留學し、ジョンスホプキンス大學やハーヴァート大學で研究を遂げられた。令夫人は其間明治女學校の一部に住んで幾分か學校の教授を受け持たれてゐたかと憶ふ。私は時々夫人を訪ひ海外に於ける五島さんの消息を聴き又明治女學校の狀況等を聴いた。明治28年に五島さんは理學博士の學位を授與せられ翌29年に歸朝された。其時は私も海外に出發せんとして種々準備を整へてゐる時であつて、五島さんから米國東部の諸大學の模様を聞き豫備的知識を得た事を喜んだ。

私は明治29年9月に日本を出發し歐米に遊學し、33年の末に歸朝した。其時五島さんは既に第一高等學校の教授であつて巢鴨に住んで居られた。私は夫から男女兩高等師範學校の教授とし又帝大の講師として忙しい生活を送つてゐた。何かの機會に巢鴨の御宅に晚餐に招待して下さつた。其時は同志社以來の數人の友人が招かれて心置きなく閑談に時間の過ぐるを忘れた。私は明治39年に京都帝國大學に轉じ、兼て京都繪畫專門學校、美術工藝學校の校長

として努力し、又同志社女子専門學校設立の爲めに力を盡してゐたが、大正2年に東京帝大文學部に轉任し、東京に歸つて來た。夫に先だち五島さんは帝大の理學部に轉任されてゐたので、遂に同じ大學の同僚となるに至つた。其後五島さんも私も入り替り立ち替り各2回程海外に派遣せられた。又學部は異つてゐたが五島さんも私も帝大の評議員となつてゐたので6年間は共に大學の樞機に與つた。後半は震災復興の時期であつた。カーネギー財團は帝大圖書館復興建築費中へ400萬圓を寄附した。政府の支出金は其外に150萬圓程であつた。兩者を合せ新圖書館を建つる設計が出来上つた頃、カーネギー財團の理事者が遙に日本を訪れたので、大學では其理事者を招待して評議員列席午餐會を開いた。其時古在總長は病中であつたので五島さんは代つて主人役を勤められ歓迎感謝の辭を述べられ、後圖書館の設計や圖書消毒設備の概要を極めて簡明なる英語を以て説明せられ主賓に満足と與へられた。

五島さんは専門學者としての仕事を随分多くされたが、歐米の文學にも趣味を有たれ、又歐米社會の狀勢に就て正確なる知識を有つてゐられたやうであつた。其語る所には毎も根據があつて人を首肯せしめた。而して事務の材幹のあつた事も理學部長の職責を全うされた事からでも判る。人材を見る明があつて人事に就ても切實に盡力されたやうであつた。古在總長の満期になつた時大學評議會で後繼總長の候補者を3人投票により舉げた時に五島さんも其1人となつたが、其時は全大學會議投票の結果は古在氏の再選になつて落着した。

私は相州腰越に別莊を持つてゐるが、京都帝大にゐた頃から毎夏家族と共にそこで暮すを例とし今日に及んでゐる。或日午後一人で散策龍口寺の山上に登つた時に、茶見世の古木の腰掛けに休んで、富士山や鵠沼沿海の好風景を眺めてゐる人がゐるのを見出した。後姿が五島さんのやうであるから横の方に廻つて見たら果してさうであつた。珍らしい邂逅を喜んで、そこで江の島を前に湘南一帶の好風光を下瞰しつゝ1,2時間を清談に費した。五島さんは二令嬢の保養の爲め片瀬に假寓を設けられてゐて、時に自分も遊びに來らるゝとの事であつた。今でも私は時に令嬢方の假寓された二階のある家の門前を通るのであるが、其度毎に龍口寺山に一人あの美しい富士の風色を眺めて樂んでゐた五島さんの床しい容子を心に浮べて快い感じがするのである。

私の在職二十五年記念會の時には五島さんは列席して食卓談話の際には私の往時に就て種種語られた。又友人が私の古稀賀筵を催して呉れた時五島さんは大阪に居らるゝ令嬢が病氣の爲め孫女を東京の御宅に連れ歸られた所、夫が猩紅熱に罹られ静養中なので宴會出席は遠慮せねばならぬとの事で、委しいお手紙を送られた。昭和10年の春であつたか上野公園の科學博物館にシーボルト關係の展覽會が開催された。私は偶然そこで五島さんに邂逅した。奉天醫科大學教授黒田源治君が展覽會に關係し盡力して丁度場内に居合はせのたので私は黒田君を五島さんに紹介した。私共兩人は黒田君より展覽に關する出版物などを貰ひ同君の案内で中を見廻はつた。樺太及び間宮海峽の地圖に對し五島さんは大なる興味を有せられ、問題を提出され且つ歴史的事蹟に就て種々物語をされ楽しい時を過ごした。

6月の半頃五島さんが大學醫院に入院してゐるが、稍重態であるとの事を奥さんが書面で言つてよこして下さつた。私も妻も醫院に時々御見舞に行つた。醫院の先生方も家族の方々にも至れり盡せりの處置と看護とをなされたのであつたが、其効なく永逝されたのは眞に惜

い事であつた。私は五十有餘年の長きに亘り五島さんの御友誼を辱うしたのは實に難有い事であつたと思ふ。私の妻も五島さんは立派な方であると常に私に語つた。五島さんは世を去られたが、私の心の中には五島さんは生きてゐて其顔を見る事も其話を聴く事も出来る。記憶と云ふよりも寧ろ直觀像の如く五島さんの佛は私の心に現れる。

五島清太郎君の追憶

萬恩莊老友 麻 生 正 藏

私は理學博士五島清太郎氏とか、畏友五島博士とか書かうかとも思つたけれども、私の心にびつたりと響かないのみでなく、唯よそよそしい氣持ちばかり浮ぶので、君としたのであるが、五島さんと云つた方が尙更しつくりするのである。蓋し學友時代からさう言ひなれて居たからである。文語としてさんを君の字に代用させたのである。

徳高く學深き君に關する私の追憶は極めて淺薄狹隘であつて、君の面影のホンの一端に就ての皮相觀に過ぎないものである。それは私の淺い、小さい眼に映つた丈の君の面影に過ぎないからである。私の五島觀は、學者としての五島博士觀でなく、友人として、人間としての五島觀である。私は學者としての君の造詣の如何を見るの明を持たないのである。

私は年齢上から言へば三歳丈君の兄分であるが、學歷上、學徳上、並に經歷上から言へば、君は私の兄であり、先輩である。今から 55 年前の明治 15 年 9 月、私が恩師新島先生の創設された京都同志社に入學した頃から知り合ひになつたが、私は當時 19 歳の晚學生であつたにも拘らず、君は既に 2, 3 年の上級生であつた。どう言ふものか、私は同級生間に親友があつたのみでなく、下級生間にも、又特に上級生間にも知己友人に恵まれた。想ふに、私が晚學生で、他の學生に比すると何處かに年寄りじみた點があつたと見えて、學友達が私に『アングル』、即ち小父と言ふ綽名を與へた事に徴すれば、其處に年増の上級生に知己友人が恵まれたのも肯定されるのである。例へば大西祝博士の如きも、君と同様に私の兄であり、先輩であつた。

私の入學 4 ヶ月後の明治 16 年の日記中には、君と談笑し、散歩し、登山遊水した等の記事が残つて居るが、君は明治 17 年今の第一高等學校に入學され、同 20 年には東京帝國大學理學部動物學科生として入學されたので、爾來文通の外、直接の交友は杜絶して、明治 21 年私が上京するに至つて再度直接の交友が復活された。不肖の私は、同志社入學以來、新島先生の人格及び思想の感化を受けたるは勿論であるが、特にその教育思想、教育信念に大影響を受くと同時に、同 15 年、大隈侯が創設したる早稻田專門學校設立の趣旨に共鳴し、私も愈遂に九州福岡を選んで其處に一大私立大學を創設する大望を柄にもなく抱懷し決心するに至つたのは、同 17 年であつた。當時唯一の同志は同級の學友兼頭和策君であつた。私は私立大學設立の趣旨書を認め、郷里の 1 人の兄に送り、その準備として私が同志者卒業、東京の帝國大學に入學し、且つその後歐米留學の學費を有志家に支出し呉れる様盡力を懇願したけれど